

本セッションでは、環境教育に関して5編の発表が行われ、25～30人程度の参加者を得た。

3-I-14-4 は、江戸城外濠の整備施策に対する選好の差を評価するのにシェッフェの一対比較法を適用した報告であった。対象地が、整備施策に対して市民の合意形成が進めやすいのかどうかを判断する手法としてわかりやすいものであった。本研究で用いたオンラインアンケートは、水辺の整備施策の選好を把握するうえで有用な手段でもある。

3-I-15-1 は、入手しやすい材料で、小中学生でも手作りできる水耕栽培方式の屋上・壁面緑化装置を小学校に設置し、その指導に大学生を関わらせた経過について報告された。装置製作上の注意点である給水と維持管理の簡便さが工夫され、「作る・育てる・食べる」取組が可能になった。今後は、教材としての教育効果の評価や、授業プログラムの作成を期待したい。

3-I-15-3 は、ハノイ下水排水公社におけるハノイ市水環境改善理解促進事業に対する千葉県の国際協力に関する報告であった。下水処理の重要性を市民に伝えるために処理場見学を受け入れることを目的に進められた。研修生が日本で受けた参加型環境教育活動の学びにより、学ぶ人中心の参加型環境教育プログラムを含む処理場見学が実践された。

3-I-15-2 と 15-4 は、水環境の評価指標づくりに関する報告であった。3-I-15-2 は、環境省および本学会が提案している水環境健全性指標を参考にした、多自然川づくり評価指標の作成についてであった。調査項目毎に対象地点の現状と整備希望を5段階評価したところ、「近づきやすさ」や「親水利用空間」で有意な差が出たものの、危険の有無が考慮されない判断に結びやすいなどの問題点も明らかになった。今後は、地点毎に「ふさわしい姿」がめざせるような評価のあり方を検討されたい。一方、3-I-15-4 は、高専学生と地域NPOが実践した水環境健全性指標による河川評価の報告であった。学生と地域住民とでは、「地域とのつながり」について差が生じた。指標を用いた評価は地域の水環境を知るための道具である。今後、観察者が地域の水環境情報を収集・整理しながら、深く理解し、適切な保全・整備活動を促せるような学習の機会提供やプログラムが求められる。

(東北工業大学工学部 山田 一裕)